

られた話であると著者はいう。根拠として如水が死んだのは京都の伏見であり、黒田家墓地移転の時、崇福寺の如水の墓からは何一つ掘り出されなかったことをあげている。

如水は生前、洗礼を受けたキリシタン大名だったため、キリスト教弾圧政策をとる徳川幕府に配慮して如水の事績を「いっさい消滅し去られた」と著者は考えている。

如水は荒木村重を説得するために伊丹城にいったが、地下牢に長く監禁された。そのため足がなえたと一般に伝えられているが、これは伊丹城滞在中に梅毒性骨髄炎を発病し動けなくなったためと著者は見ている。

著名人の病気や死因を調べ研究する「病跡学」についての本を王丸勇氏は『英雄医談』『英雄・天才のカルテ』と題して著しているが、若干杉浦守邦氏と違う見解を出している。例えば上杉謙信の死因を杉浦氏は食道癌としているが、王丸氏は食道癌は合併症であり死因は脳卒中である。源頼朝の死を王丸氏は外傷性遅発性脳卒中としているが、杉浦氏は落馬の外傷による破傷風と分析している。

本書を見ると、扱っている武将二六名の死因の中で、胃癌と梅毒が多いのに気付く。胃癌は平重盛、毛利元就、武田信玄、丹羽長秀、徳川家康、伊達政宗、徳川家光、徳川光圀の八名。梅毒は前述の黒田如水、結城秀康、加藤清正、浅野幸長の四名である。結核は意外に少なく、北条時宗、片桐且元の二名だけである。

他に、平清盛、北条泰時、足利尊氏、蒲生氏郷、豊臣秀吉、

前田利家、池田輝政、浅野長政、徳川秀忠、徳川吉宗を扱っているが、日記や手紙などの史料を検証し、通説の死因や病気に批判を加えていて興味深い。

(蔵方 宏昌)

〔東山書房、京都市中京区西ノ京小堀池町八一二、電話〇七五一八四一—九二七八、平成十二年八月二八日、B五判、四一七頁、定価二〇〇〇円(本体)〕

坪井 良子 著

### 『日本における義肢装着者の生活援護史研究』

手足を失った人にとって義手・義足は日常生活に欠かすことのできない補装具である。本書は明治期から第二次世界大戦前までの約八十年間に義肢を装着した人々の歴史を生活者の視点からとりあげたユニークな医史学書である。

内容は五章で構成され、序章で問題提起、第一章は四肢切断者の生活問題と義肢の出現、第二章では義肢生活者の社会問題化と義肢供給システムの形成、第三章に義肢装着者の生活問題と義肢供給システム、そして終章に考察と今後の課題が語られる。こう記すと固い本のように思われるが、内容は平易な文章でわかりやすい。そもそも執筆の動機が、著者の指導していた学生が悪性腫瘍で下肢切断のやむなきにいたり、その後のケアをどうすべきかにはじまるというだけあつ

て、執筆にかけた著者の熱意がストレートに伝わり、読んでいて心地よい。

冒頭、明治期以前の切断者の歴史が簡潔に述べられる。出だしの記述に多少硬いところがあるものの、わが国の義足の歴史を記述するあたりから描写は迫力を帯び、一気に引き込まれる。

よく知られているように幕末から明治にかけて、わが国で本格的な義足をはじめ用いたのは歌舞伎の人気女形沢村田之助である。田之助は若いころ脱疽を患い、横浜のヘボン博士に下肢切断術をうけた。このとき用いた義足をつけて、ふたたび舞台に現われたので人気はいっそう高まった。義足の代金は二百両（一両十万円として約二十万円）を要した。

明治期の度重なる内外の戦争によって多くの兵士が四肢切断を余儀なくされた。ほとんどがガス壊疽によるもので抗生物質のない時代の悲劇である。西南戦争田原坂の激闘で生じた障害者たち、後年首相となる寺内正毅大尉の上腕切断手術、八甲田山死の行進として知られる雪中訓練、日本海海戦後に仁川沖で補虜になったロシア兵の負傷状況など四肢切断に関わるエピソードが豊富な史料とともに次々に展開する。日露戦争ではとりわけ傷病兵が多く、障害者も多数生まれた。これを憂いた当時の英雄乃木希典将軍が考案したのが乃木武義手と呼ばれる特異な義手で、これはのちに日本陸軍によってドレスデンで開かれた万国衛生博覧会に出品されている。しかしながらこの義手は実際には切断者にとって不便極まり

なく、ほとんど用いられなかったようである。切断者の日常生活と義肢制作法に通暁しない将軍が義手を製作しなければならぬほど医師たちが義肢に関心を払わず、社会復帰に対する考えもいちじるしく遅れていた当時の状況がこの章において浮き彫りにされる。

明治後期になると欧米から本格的な義肢が輸入されだした。ここでは時の首相大隈重信が用いた義足と松葉杖が紹介される。大隈の義足については著者の新発見による史実も述べられ興味尽きない。

やがてわが国でも独自の日本型義肢が製作されるようになり、その開発の苦心が綴られる。最初は人形師や仏師によって作られたが、それでは形ばかりで実用にならず、製作者が患者にじかに会ってその人の暮らしぶりをみて、はじめて患者にふさわしい義肢を作るようになった。生活者の視点という著者のテーマが躍如する章である。

昔から大戦争が起こるたびに医療は進歩するといわれてきたが、わが国でも軍陣医学の進歩によって多くの傷病兵の命が救われた。しかしその陰で傷痍軍人の累積が社会問題となり、陸軍は本格的にこれらのアフターケアに乗り出す。痲疾者としてあなどられた四肢切断者の境遇は、職業援護体制を整えることによって生活環境が著しく向上する。本書はその経緯を詳しい史料を駆使して明らかにする。

傷痍軍人の援護行政は太平洋戦争に敗れて廃止されたが、戦前に養成された専門家は戦後のリハビリテーションの分野

でめざましい活躍をみせた。かれら開拓者の伝統は現代においても交通事故、悪性腫瘍、糖尿病等による四肢切断者のQOL向上に貢献している。しかし先天性四肢欠損症をはじめとする未開拓の分野も多く残され、さらに一層の発展が求められる。とくに義手・義足の研究は、将来の介護ロボットへの展望が期待できる前途洋々たる領域である。著者も四肢切断者の今後のリハビリテーション体制の整備と社会的な意識改革を呼びかけている。

各章に掲げられた資料と文献は豊富で、必要なものについては概要も記され読者に親切な配慮がなされている。欲をいえば年表と索引がついてるとよかったが、そのことは本書の価値をいささかも瑕つけるものではない。義手義足をはじめ補装具に関わる全ての人にとって必読のテキストであるばかりでなく、広く医療・福祉に関心をもつ方々に座右の書として推薦したい。

(篠田 達明)

(風間書房、東京都千代田区神田神保町一―三四、電話〇三―三二九一―五七二九、二〇〇二年二月十五日、A五判、二二六頁、定価本体八五〇〇円)

杉立 義一 著

### 『お産の歴史』

杉立義一博士がこのたび『お産の歴史』を上梓された。一般向けの新書判二三七頁は大著とはいえないが、八十路に届こうとする著者の、我国のお産の歴史に対する幅広い見解と、衰えを見せぬ知識の集積を平易に説かれたものである。

専門家によるこの種の本が、梶完次『明治前日本産婦人科史』以後半世紀も絶無であったこの国で、産婦人科医、助産婦はいうまでもなく、広く医史、民俗、女性史等に関心をもつ人にも歓迎されると思われる。評者自身四十年近くいくつかの助産師学校で助産史を講じてきたが、従来の教科書の記述には難点のあるものがあつた。現在「助産学概論」のカリキュラムの中で行われている「助産の変遷」の、信頼できる参考書として今後役立つであろう。本書によってこれまで内容がよくつかめなかつた事柄も、多数の貴重な図版と相俟って、理解が深められると期待される。

著者はヒトとサルの出産から始め、縄文・弥生、古墳、飛鳥・奈良、平安、鎌倉、室町・戦国、織豊、江戸時代と区分し、近代、現代にも及んで、その間産科習俗について該博な知識を提供している。この区分については評者も同感であり、象、ライオン、霊長類の助産は比較産科学的にみて意義がある。縄文の妊娠土偶、分娩土偶は原始芸術的にも素晴らしいが、これらに触れてから有史時代に進むわけである。